

紀元二千六百年記念から太平洋戦争への傾斜

昭和十五年は、皇紀二千六百年に当たると言うことで、政府挙げて祝意を表し、中央で盛大な式典が行われた。

根上町では、元旦に当たり次のような「年頭の辞」を發表している。

昭和十五年は皇紀二千六百年の輝かしい年柄であります。

我々一億の同胞は歎天喜地、これを謳歌すると共に、遙かに戦線將兵の御労苦を偲び、その勇武に信頼して、尊い感激を覚え、厚き黙禱を捧げるのであります。

斯く悠久なる歴史と無窮の将来を確保せんが為、今や国の総力を挙げて闘い、偲ぶべからざる犠牲を払い、耐えがたき困苦を忍んでいる。

而して、これは既に拡大強化せられることであろう。

故に我々は、ここに大なる自覚と決心を促し、銃後の備えに万全を期する決意を固めると共に、その熱誠尚至らざる所あるを恐れるものであります。

聞く、大陸の気候は殊に冷酷で、温和な内地に育った將兵には、かなりの辛苦であろう。

しかも故国を隔てての活動振り、軍服の袖に母国を夢見る事の屢あることを思い巡らす毎に、熱い涙の滴るを感ずるのであります。

何卒身体に一層の注意を払い、我が大日本帝国が永遠に栄える根基

を作る為に、御忠勤下さる様切にお願い申し上げます。

根上町長 森 喜平

根上町役場吏員

根上町報社

昭和十四年、昭和十五年の国内外の状況を調べてみると、次のような状態である。

中国との戦争は、膠着状態となり解決の目処が全く立たない状態で、近衛内閣は総辞職し、平沼内閣が成立し、難局の解決に期待した。

当時、ナチスは、日本に対して軍事同盟の締結を打診して来ていた。

陸軍はこれに必ずしとの態度であったが、米内光政や山本五十六や井上成美などのトリオの海軍が徹底的に反対していた。

折から、関東軍は、国境問題解決の名目で、ソ連・モンゴルと事を構えたが、全く予想外の大打撃を受けた。

平沼内閣は、ドイツの腹が読めず、「国際状況は複雑怪奇」と声明して総辞職した。

経済統制は各分野に及び、国民の耐乏生活は各方面に及び、次第に深刻になった国民徴用令、興亜奉公日とは、国民全般にとって、もはや他人事ではなくなっていました。